

洪水がやってきた

M.C.カペル作 熊倉美康訳



949 洪水がやってきた

M. C. カペル作

熊倉美康訳

岩波書店 1973

224 p. 21 cm (岩波少年少女の本 23)

小学 5, 6 年以上

M. C. Capelle: Toen de stormvloed kwam, 1962

岩波少年少女の本 23

■洪水がやってきた

定価 1100 円

一九七三年十月 八日 第一刷発行 ©

一九七九年五月二十日 第二刷発行

訳者 熊倉美康

発行者 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

緑川 亨

発行所 101 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

株式会社岩波書店

電話 〇三三六 一四二一 振替 東京六二六三四〇

本文印刷 大日本法令印刷株式会社

製本 株式会社三水舎

表紙・箱印刷 錦印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

洪水がやってきた

M. C. カペル作 熊倉美康訳



岩波書店

TOEN DE STORMVLOED KWAM

by M. C. Capelle

©1962 by Bosch & Keuning N. V.

This book is published in Japan by arrangement
with Bosch & Keuning N. V., Baarn.

もくじ



- 1 すばらしい自転車旅行…………… 9
- 2 あらしの夜…………… 26
- 3 海がのぼってくる…………… 48
- 4 みんなは、どこへ運ばれるのだろうか？…………… 65
- 5 助かったのだろうか？…………… 84
- 6 干拓地^{かんたくち}のなかの漁船^{ぎよせん}…………… 100
- 7 うれしい再会^{さいかい}…………… 124



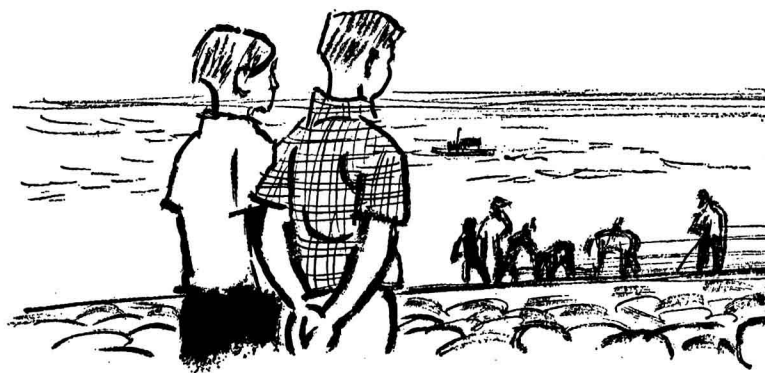
8 もうすこしのしんぼうだ……………144

9 どろの砂漠……………174

10 生きかえった島……………202

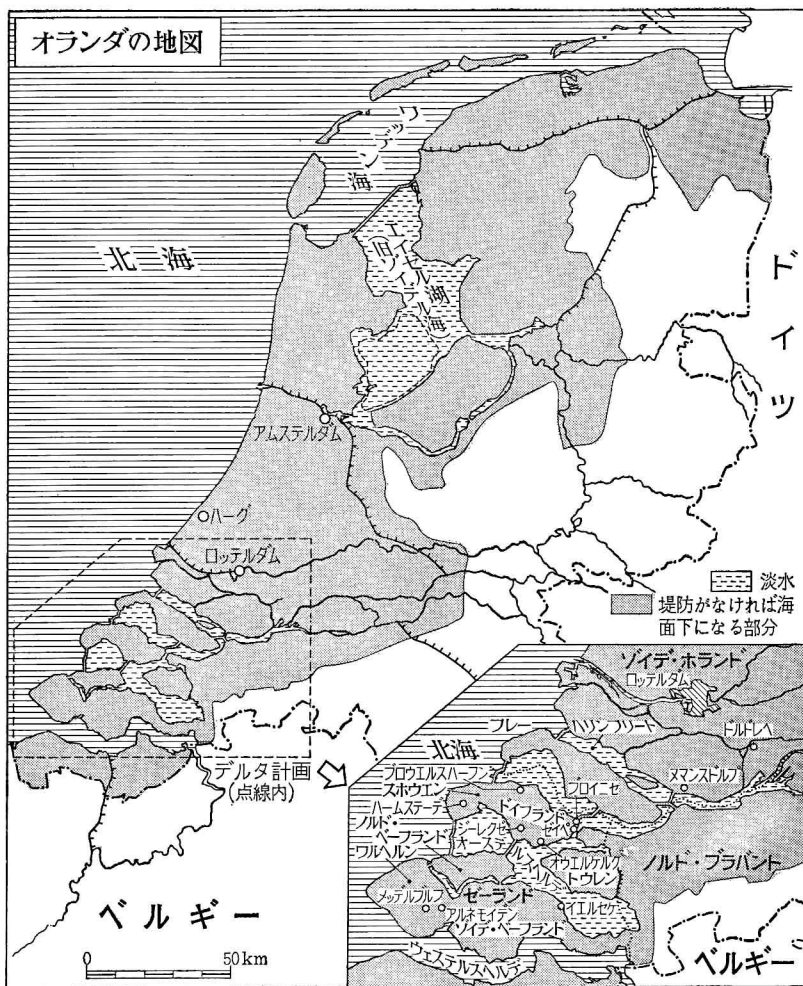
訳者あとがき……………217

さし絵 A・モーレナル
装丁 永井 潔



洪水^{こうずい}がやつてきた

オランダの地図



1 すばらしい自転車旅行

リリリリリリリリ……

目ざまし時計^{どけい}がけたたましくなりだした。せまい、しずかな寝室^{しんしつ}は、いきなりやかましくなった。すると、毛布^{もうふ}の下から腕^{うで}がのびて、その時計^{どけい}をつかまえ、がなりたてる音をけしとめた。

ブラム・ストウチェスデイクは、からだをおこした。それからぐつと背^せのびをし、声をたてて大きなあくびをすると、まだまぶたのひらかなない両の目をこすった。

すっかり目をさましたブラムは、このとき急に思いだした。

（そうだ、きょうはでかけるんだっけ！）

ブラム少年は、ベッドからとびおると、窓^{まど}のほうへすすみ、カーテンをあけ、窓^{まど}をひらいて首をだし、外をながめた。きょうはいい天気になりそうだ。深いもやのかかっていたあたりも、強くさしてくる太陽の光をうけて、しだいにこまかなちぎれ雲のようにまわりにちらばっていった。

（夏の前ぶれのようないい天気だな。そうだ、きょうは自転車でうんと走ってこよう！）ブラムは思った。

少年は、ちょっとばかり、窓のそばに立って耳をそばだてていた。太陽は、地平線からのぼりはじめたばかりだった。けれども、もう小鳥のさえずりが、きこえているのではないか。このきれいな声は、朝のはやいうちにしかきくことはできないのであった。まるでコンサートのような声だった。それは小鳥たちが、あけがたの歌を、ブラムのためにうたっているかのような声だった。朝のはやいときは、ほかに邪魔をする音がないので、小鳥たちのさえずりが、はっきりときこえるのであった。

裏の庭からは、オンドリのなき声といっしょに、男たちの話し声がきこえてきた。それが父と、作男のベルトウスのふたりであることも、すぐブラムにはわかった。ふたりはこの季節になると、きまつて朝はやくから働きはじめるのだった。畑の仕事はいそがしく、とりいれどきになると、きょうのような天気の良い日には、なおさら働かなければならなかった。

ブラムは、いきなりふりかえって、部屋のかなかのもう一台のベッドに目をやった。そのベッドでは、まだ、いとこのヒューフがねむっていた。ブラムは、目ざまし時計をとって、ねじをまわし、ヒューフのベッドに近より、ねむっているヒューフの耳のあたりに時計をあてた。そのとき、目ざましは、もういっぺんやかましい音をたてた。

ヒューフは、かけていた毛布をはねとばして、ベッドからとびおりた。それから、あいた窓から首をだした。目ざまし時計の音は、もうやんでいた。

「おまえは、やっぱりつんぼじゃないんだな。」と、ヒューフのそばへよってブラムが満足そうにいっ

た。

「あたりまえさ。」と、ヒューフがいった。「ぼくはつんぼでも、めくらでもないぞ。——きょうはい天気になるね。たのしい自転車（じきんしゃ）のりになるぞ。」

それは、ブラムもおなじ考えだった。

「いそごうや。そうすりゃ、はやくでかけられるぜ。」

ふたりは、たちまちねていたベッドをかたづけた。顔をあらい、服にきかえると、いそいで広い台所へかけていった。そこには、ブラムの母のつくってくれた朝（あさ）の食事が、もう用意してあった。

いまは夏休みだった。ロッテルダム市にすんでいるヒューフは、二、三週間のつもりでスホウエン・ドイフランド島にある伯父（おじ）の家に、とまりにきていた。ヒューフは、この農家にきてからは、なんでもおいしくて、もりもり食べるようになった。（こんなところを、ぜひ母に見せたいなあ）と、思ったくらいだった。

やがてふたりの少年は、納屋（なや）から自転車（じきんしゃ）をひっぱりだすと、いよいよきょうの旅に出発した。ブラムたちの自転車旅行は、島の東側（ひがしがわ）から西側（にしがわ）へつらなっている、砂丘（さきゅう）を見てまわることだった。ゆうべ、ふたりは、ブラムの父のストウチェスデイクといっしょに自分たちの走る道を、地図の上にくわしくした。ブラムの父は、旅行の途中で注意しなければならぬところも、少年たちに教えた。

ストウチェスデイクの農家、つまりブラムの家は、オーステルケルク村のすこしはずれにたっていた。

ブラムとヒューフが、自転車を走らせているあいだも、村はまだしずかだった。きっと、村の人たちは、ぐっすりねむっているにちがいない、とヒューフは思った。しかしブラムのほうはそうではなかった。ちょうどそのとき、村の教会の切妻屋根きりづまやねの小さな塔とうの鐘かねが六時半をうった。切妻屋根きりづまやねというのは、ちょうど本をなかばひらいて立てた形をした屋根のことをいう。こういう切妻屋根きりづまやねの塔とうは、ゼーランド地方じゆう、どこへいってもこのほかないのだった。朝の六時半というと、この地方の人たちは、たいていもう働はたらいているのだった。ただし、村の外には、農園や牧場ぼくじょうがすくないので、そこで働はたらく人たちの姿すがたは、見あたらないうわけだ。

スホウエン・ドイフランドは、ゼーランド群島ぐんとうのなかでは、もっとも北よりの島である。そうして、島は、スホウエン島とドイフランド島のふたつにわかれていた。むかし、ふたつの島は、ホウエという水路できりはなされていた。しかし、何百年もたつうちに、幅広はばい水路はしだいにうめたてられ、いまはゆたかな干拓地かんたくちにかわっていた。むかし船の通ったあたりを、ブラムとヒューフは、いま自転車で走っていた。荷物ものをつんだ船が帆はをふくらませながら、ジークゼの町をめざして水路をのぼっていったような風景ふうけいを思いださせるものは、もうなにひとつなかった。

ブラムは、まわりの畑の作物のことなら、なんでもくわしく知っていた。まるで一人まえの百姓ひやくしやうのように話すので、ヒューフはびっくりしていた。ヒューフはこの島にくるまでは、大麦と小麦の区別くべつも知らなかった。しかし、いとこのくわしい説明せつめいをきくうちに、それもこれもわかってきた。ブラムは、肥ひ



料^{りょう}をやる話とか、畑のなかへ水を流すこととか、そのほかいろいろなことを、あとからあとからヒューフに教えた。ヒューフは農業のことにくわしいこのかしこいいとこに、すっかり感心してしまった。ヒューフは、学校でも農業のことは勉強していなかった。

（都会の子どもたちのたいていは、農業にくわしいブラムにくらべて、その半分でさえも知らないだろうな）と、ヒューフは思った。

ブラムは、亜麻^{あま}のよくできるところと、できないところを教えてやった。肥^こえている土の中でそだつ、いろいろの種^{しゅるい}類のジャガイモのことも話した。

ブラムは、遠くを指さしながらいった。

「あそこに、ジーレクゼの塔^{とう}がみえるよ。」

ほんとうだった。はるかむこうにそびえている塔^{とう}が目にはいつてきた。だが、その塔^{とう}のある町へたどりつくには、これから数キロの道を自転車^{じてんしゃ}で走らなければ

ならない。ブラムはそのセント・リフンス・モンステル塔^{とう}について、父からきいたつぎのような話を、ヒューフに教えた。

——金持ちの商人たちが、フランデルン地方^{（じ）}のある有名な建築家^{けんちくか}に、堂々^{どうどう}としたりっぱな塔^{とう}をつくらせることになった。ところが、この工事はうまくいかなかった。塔^{とう}がいよいよできあがるとういう時になって、大きな障害^{しょうがい}にであい、仕事をつづけることがむずかしくなり、さしものりっぱな計画^{けいかく}もだめになってしまった。だから、はじめ考えていた、とがった塔^{とう}の形をみんなに見せるわけにはいけなくなつたというのである。

途中で工事をやめてしまった塔^{とう}は、あまり高くなく、すこし幅^{はば}広く、丸太^{まるた}のようなかつこうをして、いまもそびえている。

ジークゼの町ははじめてのヒューフは、すばらしいと思つたが、ブラムはあくびをかみころしていった。

ふるい家の形など、すこしもおもしろくないのであつた。正面にりっぱなかざりのついた壁^{かべ}のある建物^{たて}などは、ふりむきもしなかった。

ブラムとヒューフは、ジークゼの町をでると、海岸へむかつた。海岸にそつて堤防^{ていぼう}がつづいていた。ふたりは、ブラムの父から、堤防^{ていぼう}の上を自転車^{ていざ}で走れば、オーステルスヘルデ入江^{いりえ}の、すばらしいながめを見ることができるといわれてきた。

せまいが高い堤防が、島の西側へむかつてつらなっている。ヒューフたちは堤防の上を、ペダルをふみながら、たのしい自転車の旅をつづけていた。遠くのほうでは、数人の漁師が網をうって、魚をとっているところだった。ただ、海岸からはなれているので、魚とりの様子をはっきりと見ることができないのは、残念であつた。もし近かったら、堤防の上からでも、どのくらいえものがあつたかを見ることができただろうに……

「漁師たちは、どこからきたんだろうね。」と、ヒューフがいった。

「ジーレクセからきたんだらう。だけど、プロイニセか、イエルセケの漁船団かもしれないよ。」と、ブラムはこたえた。

漁船の一隻が海岸にいくらか近よつてきたとき、その舳先に、アルムとかいてあるのを、ブラムははじめて見た。これはアルネモイデンという町の略語だった。やっぱりブラムは漁業よりも、農業のほうがわしいのだった。

うつくしいながめは、堤防の上からよく見ることができた。オーステルスヘルデ入江の水が太陽の光をうけて、かがやいていた。はるかむこうには、ノルド・ペーランド島が横たわっていた。それよりずっと遠くに、ワルヘルン島の砂丘も見えるではないか。堤防の内陸側に目をうつすと、多くの水路と牧場が見えるスホウエン島がひろがっていた。ほとんど耕作地らしいものが見あたらないほど、土地は低いのであつた。